

氏名(本籍)	おおくほ たか お 大久保 隆 郎 (東京都)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博乙第2517号
学位授与年月日	平成22年7月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	王充思想の諸相

主査	筑波大学教授	文学博士	堀池信夫
副査	筑波大学教授	博士(文学)	井川義次
副査	筑波大学准教授	博士(文学)	稀代麻也子
副査	大東文化大学教授	文学博士	渡邊義浩

論文の内容の要旨

本論文は、後漢の哲学者王充について、その独特の思想と多様な特徴について、主著『論衡』の諸篇を取り出しつつ詳細に分析したものであり、従来見落とされていた側面にも光をあてることによって、王充思想研究に新生面を切り開いたものといえる。論文は序章・本論十四章・終章と、全十六章によって構成される。

本論第一章、第二章は王充思想の揺籃となった桓譚『新論』と、『呂氏春秋』を『論衡』に先行する思想の一つとして考察したものである。第一章で論ずる桓譚は、後漢王朝の成立期に強烈な図讖批判を展開し、光武帝の逆鱗に触れ、左遷され、赴任途上、病死した人物である。その著『新論』は断片しか残らないが、その断片中に「形神」論議が残存する。その内容は、前漢末に流行した神仙説、長命不死、靈魂不滅説等々の論議を批判したものであった。前漢末に夷域から伝来した浮屠(仏教)は、当時の思想界に衝撃を与え、知識人たちはこれを神仙説等に類似するものとし方術に囲いこみ、その一方、漢民族の国体維持のために宗教に擬似的な思想である図讖・讖緯思想を構築する。前漢末の王莽はその図讖・讖緯思想を利用して前漢に代わって新を樹立し皇帝となる。その後王莽を打倒して後漢朝を樹立した劉秀光武帝も讖緯思想のもと、赤伏符を手に入位することになる。この神秘的讖緯思想はさらに古典との整合性を進めることによって、その論理的・思想的基盤を強固にしてゆくのであるが、桓譚はこれを非とし、時政の問題として上奏し、光武帝の怒りを買ったのであった。この讖緯批判の思想は、やがて王充に継承されることになる。ついで第二章は『呂氏春秋』との関わりを論ずる。その要は運命論にある。『呂氏春秋』の運命論は戦国末から秦王朝にかけて形成されたものであるが、人間の運命は才能・操行の善悪や徳行にあるのではなく、それを左右するのは「時」にある、というものであった。王充の運命論もこれを承け、遇不遇は「時」にあるとし、また、人間の運命はすべて初生の際の「気」の厚薄に決せられるとの定命論を展開したのである。

第三章から第六章は、王充の古典籍批判についての考察である。王充は『論衡』著作意図を「衆書並びに実を失い、虚妄の言、真美に勝るに起こるなり。故に虚妄の語、黜けられずんば、華文は息むを見ず、華文、放流すれば、実事は用いられず。故に『論衡』とは、軽重の言を銓かにし、真・偽の平を立つる所以にして…」(『論衡』対作篇)と述べる。この「実」を失った古典籍への批判は『論衡』の中で大きな位置を占めるものである。王充はこの古典籍批判の各篇を「九虚三増」というが、第三章はまず「九虚」諸篇についてで

ある。呉越地方に伝承される延陵の季氏の説話、舜・禹の埋葬地説話、呉王夫差と伍子胥の物語、伍子胥の悲恨が「水を駆り立て波濤となり人を溺死させる」という伝説、「会稽」の地名の由来等々を取り上げ、これらの超自然的事態を王充が「虚」として否定していることを論ずる。また王充は、齊の桓公淫行説に対して、桓公に人倫に反する禽獣の行為、姦淫はあり得ないと、覇者桓公を評価している。第四章は「三増」についてである。ここでは王充が古典的世界を象徴する堯・舜・文・武の至徳の過剰な礼賛を批判することと、一方、桀・紂の悪逆非道（酒池肉林）の説話を批判していることが論ぜられ、古典に君臨する聖王の過褒表現の批判は、古典古代の価値の転換を意味することが論ぜられる。第五章は、孔子と孟子を刺する諸篇の考察である。王充が、『論語』『孟子』中の会話や文章の矛盾を指摘し、運命論を視点にして、それらを批判的に論証していることを論ずる。第六章は、王充が『韓非子』の法至上主義とその偏向について、儒家的思考から批判していることを論ずる。この批判は文吏・儒生比較の人材論ともなるが、そこには厳しい当時の外戚批判を内に含むことが指摘される。

第七章は、王充の禁忌習俗批判の考察である。もともと義理の禁であるべきタブーが、禍祟・「凶悪」なる禁忌習俗として伝承されていること、これを畏懼し、盛行する淫祠等々を批判し、さらに諸方角に位置する神々・天神をも否定するまでに至っていたことを論ずる。第八章は、著龜卜筮批判について論ずる。著龜卜筮は上古からの伝承であるが、王充は賢聖の占筮のみを肯定する。その目的は、大衆を納得させるために、賢聖の判断の正当性を卜筮の経験知によって示すことにあったことが論ぜられる。第九章は鬼神論であり、先ず生と死の間にある現象である妖祥が取りあげられる。王充は「非実」・「象」・「妖」・「非物」である現象を妖祥とするが、これら妖祥は実は「気」に還元されるものとしていることが論ぜられる。第十章は王充の薄葬論を論ずる。王充は儒・墨の論議をふまえ、鬼神（靈魂）を否定し、死者に知なしとして薄葬を主張する。厚葬の蔓延とその弊害は国家危亡の道に連なる。論死から薄葬に至る論述は、極めて真摯に熱く国家の危機を説くものであり、『論衡』著作意図の危機意識と密接に関わる。当時は旱魃・洪水が続き、厚葬による家産の喪失の蔓延等、擾乱には至らぬものの不安定な情勢であったが、そうした災厄の解除のための淫祠や死者厚葬の盛行を、王充は「国家危亡」の危機としてとらえていたことが論ぜられる。

第十一章、第十二章は、王充が大漢王朝の鴻徳を礼賛し、漢朝を歴世比類なき「太平の世」と頌ずる頌漢論を考察する。儒教經典に示される古典的世界は、上古の「太平」の理想を示すものであるが、王充は現世（漢）においてこそ太平の実現を見、これを後世に伝えることが臣子の務めであるとしていたことを論ずる。そしてこの意識は『春秋公羊伝』の大一統・攘夷の思想に培われたものであることが論ぜられる。

第十三章、第十四章は、「太平の世」の為政の実現に必要な官吏の人材を説く王充の人材論についての考察である。王充の生きた後漢明帝期は、「永平の四大獄」の苛政が行われ、その実務を文吏が担当していた。実務官吏、文吏が重用され、古典を学んだ儒生は侮蔑される。そこで王充は熱意を込めて儒生の優位を説く。そして古典に通暁する者を通儒（通人）、古典を基礎に胸中の思いを文章に表現する者を文儒（文人）・鴻儒といい、それが理想的人間につらなるのである、と。また、賢聖論の中で「大人」を説く。大人とは『易』乾卦の九二、九五の爻辞に記され、その文言に称えられる人物像である。王充は、大人は聖人・賢者であり、その徳は自然の「天徳」と合一している。そこで大人には自然無為・自然の化育の力が共有されているとする。しかし現実の超越を志向する老聃の徒は賢聖ではない。この世に「太平」を実現するに、聖帝や股肱の臣は「大人」でなければならないとするのである。

以上、本論は王充の思想の諸相について十四章にわたって論じてきたが、このようにみえてくると『論衡』各篇は統一を欠くかにも見える。終章はこのことについて論ずる。王充には実は一貫した著作意図があった。王充はみずからの思想を『詩経』の「思无邪」に対応するものであり、「虚妄を疾す」（『論衡』佚文篇）るものであるとしていた。この著作意図は、王充が抱き続けた「危亡の道」に対する危機意識にはかならない。虚妄の言や華文の奔流は、王朝の危機に通ずる。後漢王朝の草創期、王充の危機意識を醸成し、著作へ

と駆り立てたのは何であったのか。それは第一章で論じた、夷狄徼外・西域から伝来した異文化の宗教（浮屠＝仏教）であったと想定される。浮屠の教えは現実を苦界とし彼岸の世界を説き、解脱し涅槃を求める。中国の伝統的「太平の世」は此岸にある。王充は古典的伝統文化を身につけた知識人として、これに対抗しようとしたのである。王充は「太平の世」の実現に寄与すべく、著作を続けたのである。彼はその意を「虚妄、真より顕かに、実誠の偽に乱さるも、世人、悟らず、是非定まらず…、情以て之れを言わば、豈に吾が心の能く忍ぶ所ならんや」（『論衡』対作篇）と述べている。王充はまた、孟子の「吾れ已むを得ざればなり」の語に己の心情を映し出す。書虚篇に覇者の桓公を評価するのも、桓公が宰相管仲とともに夷狄異文化を抑止したところにある。後漢の頃、中国に伝来していた浮屠の教えがいかなるものであったかは、資料は僅かに残るだけで、多くは歴史の闇に消失している。王充は「浮屠」の語を用いず、現世を「太平」とし、数々の瑞祥・符瑞を論じ、頌漢論を展開した。『論衡』は、西域異文化への批判を前提にしつつ、王朝の「太平」を宣言したものであった。

審査の結果の要旨

本論文は、中国後漢時代の王充について、その主著『論衡』をとりあげ、その思想を詳密に考察したものである。論文は『論衡』諸篇のもつ思想的意義を、それぞれの篇のもつ性格ごとに細緻に分析している。従来『論衡』の研究にあつては、全体を大きく見渡しつつその思想的性格を評価しようとしたものが多かった中で、本論文の緻密さは群を抜いたものであり、王充『論衡』研究の水準がこれによって大きく深められたのは確かなことと評価できる。ただ本論文は、著者自身も指摘しているように、諸篇それぞれへの詳細な分析という面が濃厚であるがゆえに、王充思想への全体的統一的解釈においては、物足りないと感じるところがある。これについて著者は、当時中国へ流入してきた仏教への文化的対抗という面にそれを見ているが、この問題は誰もが分かるとおり巨大な問題である。本論文においてはまさにその端緒がつけられたわけであるが、これについては今後著者のより充実した論証が望まれる。

論文審査ならびに審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

よって著者は、博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。